

ア シ エ ン バ ・ レ コ レ ク シ ヨ ン

少女の追憶 第二章

R
E
F
L
E
X (著) 沢北和彦

第一章 待ち伏せ

宇宙世紀0092年日時不詳――。

ロンド・ベル所属のアイリッシュ級戦艦ローゼンアークの艦橋から宇宙の深淵を眺めながら、ロバート・ウォルコット少尉は大きな欠伸をした。

毎日、毎日、同じような景色が目の前にある。

最初は興味が勝っていたが、時間とともに退屈が頭をもたげ、いまではそれすら通り越して眠くなってくる。

地球連邦軍の外郭部隊として、コロニーの警備や監視に当たっているロンド・ベルに配属されたときの高揚感や期待感は、もうどこかに飛んでいってしまいそうだ。

「あゝあゝゝ」

無意識だろうか。欠伸がてらに声を出したウォルコットは、慌てて口を押さえたが、

「パイロットがブリッジで欠伸とは、よほど暇かね」

じろりと睨む艦長の視線と言葉に、恐縮しきりに敬礼を返した。

「失礼いたしました、艦長」

「連日、コロニー間の移動に費やしている。ウォルコット少尉、手が空いているなら演習も兼ねて、ジェガン部隊は先行したまえ」

「よろしいので？」

「次の寄港地はフェザーホールだ。アクシズ残党の潜伏先ではないかとの噂もある。モビルスーツ部隊は先行し、本艦の安全を確保せよ」

「了解！」

喜び勇んで艦橋を飛び出したウォルコット少尉は、すぐに麾下のジェガン部隊を率いて、ローゼンアークを離れた。

ロンド・ベルには絶対的なエースがいる。一年戦争で名を馳せた、アムロ・レイ大尉だ。ウォルコット自身、自分がアムロ・レイより上のパイロットだとは微塵も思っていないが、旗艦ラーカイラムの直営部隊に配属されてもおかしくないという自負はある。

グリプス戦役でも、ネオ・ジオン抗争でも、それなりに戦果を挙げてきたし、なにより生き残ってきた。

士官学校を出ていない一兵卒からの叩き上げで、三〇そこで尉官になった己への誇りは大きい。

だが、それを打ち消す変化は、あまりにも突然だった。

「なにッ……！」

フェザーホール近郊のデブリを通過中、いきなり味方のジェガンが爆散した。

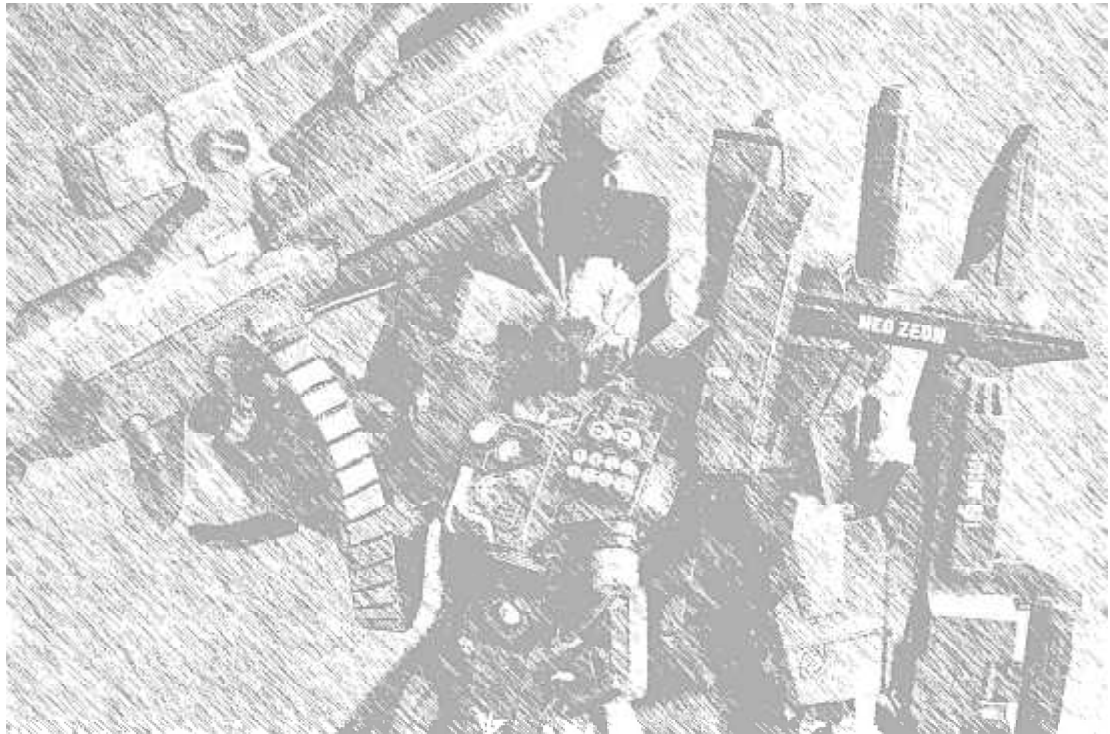
「コールマン！」

部下の名を叫ぶウォルコットの視界で、なにかが光る。

「インコムかッ……！」

咄嗟に避けたが、別角度からの一撃が、シールドを吹っ飛ばした。

「チィッ！ バートン、後退しろ……！」



語尾で、指示した部下のジェガンが爆発する。

ウォルコットのジェガンはなんとか戦線を離脱しようとしたが、デブリから現れた青い機影に愕然とした。

「ダ、ダブルゼータガンダム！ 木星に持ち出されたって話じゃ……！」

ウォルコットの視界で、青いガンダムは手持ちのハイパー・メガ・キャノンを悠然と構える。

そのとき、ローゼンアークから通信があった。

「ウォルコット少尉、援護します」

「駄目だ、くるな！ 位置がバレる、やられるぞ！」

必死の制止も虚しく、ローゼンアークの主砲が火を噴く。

その火線を悠々とかわして、青いガンダムはハイパー・メガ・キャノンを発射した。

膨大な熱量が一直線に走り、ローゼンアーク

クの巨体を引きちぎった。

大爆発を起こして轟沈する母艦を認めて、ウォルコットは唇を噛んだ。

青いガンダムは、左手のダブルビームライフルを彼に向けた。

「為す術なしかよ……！」

操縦桿を握りしめるウォルコットの視界を、ビームの光が埋め尽くしていった――。

※この続きは製品版でお願いいたします。

※この物語はフィクションです。実際の個人・団体・事件等とは一切関係ありません。登場する人物、名称はすべて架空のものです。また、機動戦士ガンダムにおける公式設定ではありません。

※加筆、修正、無断転載等のご遠慮くださいますよう、お願い申し上げます。